歴史散歩

れきしさんぽ No.14

高良山獅子舞と御井町風流

「まつり」にかかわる郷土色豊かな芸能や行事は、今もなお筑後の各地で、季節ごとに、祭礼とともに華やかに繰り広げられています。しかし、明治生れの古老の話によれば、昔の祭りのにぎわいは、現在とは比べものにならぬほど盛大だったといいます。

第二次世界大戦後、ムラの守り神を中心とした協同性、農耕作業の集団性などで支えられていた「まつり」が、しだいに衰退の方向をたどり、その「まつり」に伴う芸能も消滅してきました。

現在も伝えられる民俗芸能は、このような難関を乗り切って、祖先が守ってきた貴重な財産です。

今回は、平成10年に久留米市の無形民俗文化財に指定された高良山獅子舞と御井町風流をご紹介します。

（高良山獅子舞）

（御井町風流）

1. 高良山獅子舞

古代の人々は、神を非常に力の強い魂と考え、自然界の森羅万象から人間の生死すべてが、魂の動向で決まると信じ、生活や政を進めるには、神をこの世に呼び出し鎮めなければならないと考えました。獅子は神が現れるときの姿(権現)であり、暴れる獅子が悪霊を祓うと信じられ、この獅子舞を「権現舞」と呼びます。筑後川近隣の獅子舞はこの系統です。一方、曲芸など華やかな獅子舞は「代神楽」と言います。

筑後地方の獅子舞は、鎌倉時代に田楽美麗法師であった梅津家が独占していました。梅津家は菅原道真を慕って筑紫に下り、高良山大宮司家の庇護のもと、三潴荘夜明(現久留米市大善寺町)に住み着き、高良神社大祭の獅子・田楽・竹の舞を司りました。高良山獅子舞が地元住民によって奉納されるようになったのは、百年ぶりに高良神社御神幸が復活された寛文9年(1669)以降であるといわれています。

明治になり、御井町字名「高良山」の住民が「高良山同志会」を結成、獅子舞・風流を奉納しました。この頃御神幸は10年ごとに行われ、昭和16年、26年は高良大社より篠山神社まで行列が行われました。御神幸の際、獅子舞は魔祓いとして先頭に立ち、要所要所で舞いました。36年の御神幸は下宮社までで、その後は行われなくなり、獅子も中断していました。

昭和52年、高良山町内在住の16歳以上60歳までの男子で「高良山同志会」が再結成され、高良山元旦祭、10月10日例大祭(俗に「高良山おくんち」と呼ばれる)に社前にて奉納されています。

筑後の獅子舞は「祓い」を基本とした荒れ獅子ですが、高良山獅子舞はこの「祓い」の意味を最も単純・厳粛な形で表現しており、古風が守り続けられてきたことが伺われます。

一頭の前後に二人が入り、赤黒の二頭で舞います。前の者は、左手を真上に伸ばして約25kgの獅子頭を支え、右手はあごを持ち口を開閉します。正面に5歩進んで足踏みし、獅子頭を左右へ２回振り上げた後、真ん中に高く掲げ２回大きく口をかみ合わせます。次に向こう向きになって同じ動作を繰り返し、元の場所に戻ります。再び正面向きに、同じように左右２回ずつ振り上げ、正面で２回かみ合わせて終ります。

胴は苧を編んで作り、全体で50kg程の重量になります。獅子頭を大きく振るだけで、相当の力仕事です。勇壮・厳粛な形で現在まで伝えられてきた貴重な文化財です。

（高良山獅子舞）

2. 御井町風流

田楽は、田植において天空から田の神を勧請(かんじょう)し、太鼓をたたいて囃(はや)し、豊年を祈願する神事ですが、この田楽が次第に「風流(ふりゅう)」化していきました。「風流」は、華やか・派手・きらびやかという意味で、贅沢三昧(ぜいたくざんまい)の生活を送っていた平安期の貴族が、家具や調度のきらびやかな装飾などを「これは風流な」というように使ったことから庶民に広がり、祭の道具を飾りたてたり、衣装を華美にしたりということが行われるようになりました。

（御井町風流）

中世以降の風流熱の刺激を受けて発達した芸能は、日本各地に数多く伝承されています。

筑後地方に伝承される「風流(ふりゅう)」は、分類の上では九州一円に広がる太鼓楽で、中央に据えた一基、もしくは二基の大太鼓を、伝えられた打法で打ちまくります。

御井町風流がいつ頃始まったのかは不明ですが、「高良玉垂宮神秘書」等にみられるように、古来高良山では神幸行事とかかわって田楽が行われてきました。また、筑後楽は平家伝説を基本としますが、平家伝説の伝承と高良山との関わりからも、御井町風流は筑後川を中心に広がる筑後楽の本流と思われます。

明治になり、御井町の字名「高良山」の住民が、「高良山同志会」を結成し、高良神社御神幸に獅子舞とともに奉納しました。戦後の中断後、昭和36年に復活、10月10日例大祭（高良山おくんち）と翌37年の高良山元旦祭に奉納し、再び中断していました。昭和52年、御井町住民により「御井町風流保存会」が結成され、元旦祭、おくんちで奉納されています。

太鼓方は、赤毛赫熊(しゃぐま)に白鉢巻・黒紋付・白襷(たすき)、赤の裁着袴(たつつけばかま)に白足袋・草鞋(わらじ)、両手に短い枹(ばち)を持ち、二面の太鼓に一人ずつ向かい、同じ動作で太鼓を打ち鳴らします。神前では「神の舞」、カドウチでは「幕流(まくりゅう)」、神幸行列などで移動しながらは「道行き」を打ちます。鉦方(かねがた)（主として小学生）の衣装は、黒紋付・白鉢巻白襷・袴に白足袋、隣り合った二人が一組となり、一個の鉦を提げ、「エンヤーホイ」の掛け声を入れながら、それぞれ持った木槌(きづち)で鉦を叩(たた)きます。笛方は、黒紋付・裃(かみしも)・袴・草履、横笛は女竹を使い、歌口を除いて７穴あります。口上を述べる子ども一人だけが色物を着、頭に烏帽子(えぼし)を冠し背中に御幣を担ぎます。

（口上を述べる）

御井町風流は、断絶と復興を繰り返しながらも、筑後一円に広がる風流の単純・素朴で力強いという特質を保っています。

3. 高良大社御神幸

神が、山から村里に降りて人々の願いを聞き、再び神社に帰る神事を「神幸行事」と総称します。この神の一時的な旅には、目には見えない神が確かに動かなくてはなりません。その神が宿るものを「依代（よりしろ）」と呼び、依代に宿られた神を神殿を模した神輿（みこし）に移して旅をするようになりました。

また、神の宿る依代を警固するものの行列だけでなく、里人がいろいろな芸能を奉納し、神社から旅所まで供をするようになりました。大名行列や、稚児行列、獅子舞（ししまい）、風流（ふりゅう）などが付随したりしました。このように、神幸行事は、その土地の民俗芸能を統合した一大イベントです。

久留米市では市の無形民俗文化財の須佐能袁神社の神幸行事、若宮八幡宮の神幸行事などがあります。

高良大社御神期大祭は、50年に一度行われます。平成7年に行われた1600年大祭は、先導神職、赤鬼・青鬼、獅子方、風流方を先頭に、稚児行列まで、行列の長さは500mを超え、高良大社から篠山神社への往復を3日をかけて行列する盛大な祭典でした。

神護景雲元年（767）勅使によって大祭が始まったと言われ、その後何度も途絶えながら復興されてきました。古記録には、「高良玉垂宮大祭祀」の「神幸之次第」や「高良玉垂宮神秘書」などに記載がみられ、1812年に書かれた「高良山玉垂宮神幸絵巻」には昔の神幸行事の様子が具体的に描かれています。

高良山玉垂宮神幸絵巻（高良大社所蔵）

4. 高良山例大祭（高良山おくんち）

10月9日からの3日間行われる高良神社の秋祭で、古く九州九ヶ国の国司郡司が参集して祭を行い、少弐・大友・菊池・島津の九州四族が四頭として輪番に神事を行っていました。

俗に高良山おくんちと称して、久留米地方だけでなく筑後・肥前一帯にかけて栗御飯を焚いて祝う風習があり、夕刻になると子どもたちは「高良山くんちに栗くれんの一」と各戸を廻って栗を貰い歩く習慣もあったと言います。参道で柿や栗が売られ、飲食店では特に「かます寿司」が作って売られました。

現在おくんちでは、高良山獅子舞・御井町風流の他、高良山十景舞や浦安の舞などが演じられます。

高良山十景舞は、高良山に伝わる「高良山十景」に新たに舞踏を創作したもので、地域の特性に応じた新しい芸能の創出の例と言えます。

発行機関名	久留米市教育委員会
〒830-8520	久留米市城南町15-3
文化財保護課	0942-30-9225
久留米市埋蔵文化財センター	0942-34-4995
久留米文化財収蔵館	0942-38-6194